

真の国際人とは—E・S・モースに学ぶ

久保田 博子

【要旨】

本論では、「真の国際人」とは何かということ、御雇外国人のE・S・モースから考察した。モースは、明治初期に御雇い外国人として日本に滞在し、当時の古き良き日本人の美德に大いに感銘を受けた。また、彼は欧米の影響を受け手、今後消えてしまうであろう日本文化や日本人の美德を書き残し、庶民の使う生活用品を博物館に遺すことで、それを後世の私達に伝えた。

第1章では、先行研究を分析して、モースの生い立ちから三度の日本滞在、生涯までの出来事や業績、人物像、日本研究の特徴などを整理した。

モースは、1877（明治10）年に来日、大森貝塚の発見や、東大の動物学教授に就任、進化論の日本への導入など、動物学者として日本に残した功績も大きい。動物学者として来日したモースであったが、日本人の道德性の高さや日本文化に心が引かれていき、アメリカに帰る頃には日本学者になっていたと言ってもよいほどに、日本研究に没頭するようになった。

モースは「手遅れにならないうちに研究をはじめなければ、伝統文化を記録に残す機会が永久に失われてしまう」（『太田雄三 『E・S・モース 〈古き日本〉を伝えた親日科学者』ESモース』p127）と、今後消えて行くであろう古き良き日本の美德を後世の人々に書き残しておくとの動機で日本研究を行った。彼が来日した明治初期は、日本が開国により欧米の影響を受けて変化し始めた頃である。既に日本人の生活は少しずつ変わり始めていたであろう。やがて確実に日本市民の生活も、欧米の影響を強く受け、変わってしまう生活スタイルと、生活が変容することで失われてしまうであろう古き良き日本人の美德を書き留めておかねばならないという使命感に駆られて、彼は使命感を持って詳細に書き留めた

外国人のモースであるからこそ気付く、日本の美德は数多くあった。それらは当の日本人であると気にもとめない「あたりまえ」となっていたことであろう。また、アメリカに生まれ育ったモースだからこそ、日本の西欧化で日本の美德が失われていく、西欧化は日本人に内面的にマイナスに働いてしまうことにいち早く気付くことができただけであろう。当時にモースが日本に来て、日本の美德に感動し、詳細に書き留めたり市民の日用品を収集し、保管したりしておいてくれなかったら、あったことすら知られていない日本文化や日本人の美德は数多くあったことであろう。そういう意味でも、モースがああ時代に日本に来たことは、日本にとっても非常に重要な運命的なものであったように思う。

モースの日本研究の特徴はまず、彼が短期間の日本滞在にも関わらず、日本研究を大成できたことは、多くの日本人の協力や支えがあってこそだということである。

モースは日本文化に対して非常に感銘を受けており、非常に強い興味・関心をもって、彼の日本文化研究に協力した日本人は、階級の高い者から一般民衆まで、実に多

修士論文要旨

くのあらゆる人々が協力した。それも、多くの人々は、モースが日本文化に興味を持ち、日本文化の良さを感じていることや、日本の庶民の日用品などをアメリカの博物館に展示することに対して、喜びを感じており、進んで彼に日用品をあげるなどして、快く彼の研究に協力した。モースの日本文化に対する興味や関心、尊敬の念は、日本人にしてはとても嬉しく、誇りを感じることであったのだ。

当時来日した多くの外国人には、西欧中心主義の見方があった。当時の欧米人から見れば、開国したばかりの日本というのは、比較にならないほど劣っていると見えて当然であろう。当時、多くの外国人は日本に対して「野蛮な国」、「遅れている文化」との見方をした。

しかし、モースは日本文化を研究するうえで一貫して、「バラ色の眼鏡」をかけることを意識したのである。そのことは、彼を日本に対する偏見から遠ざけ、また今日の文化人類学的な研究を可能にさせたのである。こういった点からしても、モースの行った日本研究は優れていると言える。

第2章では、モースの心を動かした古き良き日本人の美德を、モースが書き遺した当時の日本人の美德が記されている著書『日本その日その日』（1～3巻）を元に大きく4つに分類した。「子供の天国、子供の道徳性の高さ」、「勤労・勤勉、正直」、「思いやり」、「自然を大切にする」である。

モースは来日前、日本について全く知らず、日本は劣った野蛮な国だと思っていた。彼は貝の研究をするという目的のために来日したのであった。しかし、日本に降り立つ瞬間から、彼の目に広がったのは、「ヘイ ヘイチャ ヘイチャ ヘイ ヘイチャ」と船頭たちが声を合わせて勢いよく船を漕ぐ光景だった。モースの日本の第一印象は、エネルギーいっぱい働く日本人の姿であったのだ。

日本の地に降り立った瞬間、モースは叫びたいほどの喜びと、わくわくした胸の高鳴りを感じたのだ。その日から、モースの目に映る日本の風景は、明るい、世界中で一番幸福に生きる人々の姿なのであった。モースがほぼ毎日書き留めていた日記を見ると、彼は日常の数多くの場面で日本人の生き方や考え方に感動していたことがわかる。

モースが来日した明治初頭の日本は、開国後間もない時期であり、日本独自の文化が色濃く残る時代であった。しかし、欧米の文化の影響は勢いよく日本に及び出しており、モースは日本の文化はやがて消えゆくであろうことに確信をもって感じていた。欧米から来たモースの目には、欧米の人々よりも、日本人の暮らしの方が、よほど幸せに映ったのであった。

モースは日本文化が失われていくことや、今日本人が営んでいる日本独自の文化があったこと自体が忘却されてしまうことを嘆いた。消えゆく日本文化に悲しみを感じながらも、せめて日本独自の素晴らしい日本文化と日本人の幸福な暮らしがあったことを後世の人々に残そうと、自分自身に使命を感じて、日本文化や当時の庶民の暮らしを事細かに書や数多くのスケッチに書き留めた。また、当時の庶民が使っていた数多くのあらゆる日用品の収集と保存に努めた。

「子供の天国、子供の道徳性の高さ」については、日本人の子供の育て方に、モー

修士論文要旨

スは事あるごとに感銘を受けた。世界中で日本の子供ほど大切にされている国はない、日本ほど子供にとっての天国はない、とモースは度々言っている。日本の子供は、周囲の人々にとっても大切にされて育つ。大人は子供を最優先にするし、子供の健全な成長を、最大の喜びとしている。それは、自分の子供でなくても、社会全体で子供を育てようとしているし、健全な成長を願っている。

このように、生まれたときから母親や家族から最優先に接せられて育つ日本の子供たちは、物心つく前から、親や家族からの大きな愛情の中で育つ。だからこそ、当時の日本の子供たちは安心して、健全に育つたのである。子供は大きな愛情を受けて育ってきたので、周囲にも思いやりの心をもって接することが出来るし、高い道徳性を身に付けている。また、自分たちが親になった際には、子供に同じように大きな愛情を与えて育てることが自然とできるのであろう。日本では、このような子育てが長年にわたり継承されているのである。赤ん坊の頃から、親の大きな愛情を受けて育ち、親に最優先にされ、一生懸命に働く親を見てきたからこそ、日本の子供たちは親を尊敬し、親の大恩に報いたい、親孝行をしたいと思うのである。

モースにとって、日本人の子供に対しての寛容で温かい眼差し、そして子供を一段低く見ることのない尊重する姿勢というのは、とても共感する部分が大きかったのではなかろうか。モースの心の奥で求めていた教育観があるとすれば、それは日本人のような子供に対しての教育観そのものなのではなかろうか。

また、日本の子供は礼儀正しく思いやりの心が育っている。それは、親や周りの大人など、日本の大人が大いに礼儀正しく、思いやりに溢れているからであるに他ならない。大人の道徳性の高さがそのまま生まれたときから子供の目に映り、子供たちは自然と大人のように考え、振る舞うようになるのである。また、日本の大人は、子供が幼い頃から子供を一人格者として認め、一段見下げずに尊重して育てていく。また、親をはじめ周囲の大人は子供を最優先して育てる。子供は、幼い頃からそうした大人達の大きな愛情を受けて育つのである。だからこそ、子供は他者に対して愛情を持って接することが自然と出来るし、思いやりを多く受けてきたために、他者に意地悪をすることをしない。他者に対して自然に愛情を持って、思いやりをもって接することが出来るのである。

「勤労・勤勉、正直」は、モースは日本人の労働者に全体的に明るく活気のあるイメージを持っていることがわかる。老若男女問わず、子供も、障害のある人も、日本中誰もが各自の仕事をもって働いており、それもととても威勢良く、懸命に働いている。そのような働く人々が、東京を始め日本の街に溢れており、町中の活気や明るい空気をつくっていた。歌いながら、ニコニコしながら働いている様子は、いかにも魂いっぱい、幸せに生きているようにモースの目には映ったのでなかろうか。毎日、人力車から彼らの様子を眺めていたモースにも、毎日明るさや励まし、彼自身の職務に励むエネルギーともなったのではなかろうか。

そして、日本人の労働観は、仕事は神の仕事をさせて頂く、という心が基盤となっている。彼らの仕事は単に労役ではなく、お金を稼ぐことが第一の目的でもなく、日本人にとって仕事とは、生きることそのものである。仕事を一生懸命にすることを通して、彼らは人格を磨き、優れた道徳性を身に着ける。仕事は教育でもあるのである。そして、日本人ほど相手のために思いやれる人々はいない。商売であっても何であっても、日本

修士論文要旨

人は利他的な精神で仕事を行っている人が多い。他者のために働くことが、結局は自分のためになっている。日本人の働く報酬はお金だけでなく、彼らは人徳を働くことによって高めているのである。

また、モースは日本人の「正直さ」に事あるごとに驚きと共に、感動している。それを象徴するのは、当時の開けっぱなしの店や家などの建物である。アメリカであれば、盗むなど悪さをする者が多いために考えられない光景であり、モースはとても驚いた。開けっぱなしの街には、行儀の良い空気が溢れていたのである。店主が店を開けっぱなしのままどこかへ出かけてしまい、店主の戻ってくるのを長時間店で待つということもモースはしばしば目にしたのである。また、家々もあけっぱなしで、赤ん坊に乳をやりながら寝ている母親の無防備な姿が開けっぱなしの家から丸見えなのである。日本の街に悪いことをするような人がいなく、安心しきっている証拠である。モースが思わずスケッチしてしまったほどに、平和で幸福な暮らしをしている日本人の様子がそこに現われていたのである。

また、モースは日本滞在中、数多くの場面で日本人の非常なまでの正直さに感銘を受けた。多くの日本人の正直さに触れたモースは、日本人に対する絶大な信頼を寄せていったのである。

「思いやり」については、モースが称賛していたように、非常に礼儀正しい日本人の行動は、その元をたどれば、そこには相手の立場に立って考える思いやりの精神から発生しているのではなかろうか。稲作文化で、昔から家族以外の人々と共生してきた日本人だからこそ、自分一人では生きていけない、相手との関係を良好にしておくという文化の積み重ねが、日本人の思いやりの深さを育てていったのではなかろうか。そのような思いやりあふれる日本人は、行動に相手を思う心がこもっている。日本人のそういった心のこもった行動は、度々モースの心に触れ、温かい感動を与えたのだろう。モース自身も、相手を思いやる思いやりの心が、日本人の感化によって育てられただろう。温かい心をもった日本人のいる日本は、アメリカ人のモースにとっても、とても居心地がよい、天国であっただろう。

「自然を大切にすること」ということは、モースが最も共感したものであり、ここまで挙げてきた日本人の美德すべての元にある価値である。日本人の生き方や考え方の根底には、「自然との共生」という考えがある。古くから日本人は、人間の力を遙かに超えた自然との調和を意識して生きてきた。その考えがベースにあるからこそ、対人でも、相手との調和をとることを大事にし、社会との調和、そして自分との調和をとることを大事に考えて生きてきたのである。

第3章では、モース自身の変容を考察する。モースは、来日した直後から、彼は日本文化に魅了され、毎日の日記に記されているほど、彼は日々、日本人の美德に感銘を受けた。とりわけ彼を感動させたのは、今まで彼が見たことも無いような道德性の非常に高い人々が暮らす様子であった。そして、経済的に余裕があるわけではない一般民衆であっても、日本人は老若男女誰もが非常に礼儀正しく、優しい。日本中誰もが高い道德性を身に付けているのである。

モースは、短い日本滞在の期間ではあったが、モースが日本人から受けた衝撃は非常

修士論文要旨

に大きく、彼の既存の価値観を根底から変えるようなものであった。野蛮な、遅れた国だと思っていた日本に暮らす日本人は、母国アメリカをはじめ、世界中のどこに国の人々よりも、圧倒的に幸せそうに生きているのである。日本人の価値観や考え方をすれば、人間は、より幸福に生きられると確信したモースは、意識的にも、無意識的にも、彼らから大きな影響を受けた。彼自身大きく変容していったのである。そこに、モースに変容をもたらした日本文化の感化力がある。

また、モースは地位や階級、老若男女を問わず多くの、あらゆる日本人との交流を通して、どんどん日本人の美德にのめり込んでいく。モースにとって、総じて道徳性が高く、優しく親切な日本人に接することは、心温まるものがあつた。彼はそれら日本人の美德に感銘を受けるとともに、生涯にわたって彼ら日本人の美德を意識的、無意識的に自分自身に取り入れていった。そこに、モース自身の品性がより良くなり、日米で老若男女関わらず、多くの人から愛され、慕われた生涯となった、彼自身の内面的変容がある。

モースは日本に滞在し、日本人との交流や、日本文化に触れることを通して、モース自身内面的に大きく変容していったことがわかる。彼自身が人力車夫たちの働く姿を目の当たりにし、感銘を受けた、争わず平和的に物事を治めるといふ日本人の美德を、自らの内に、無意識的にか意識的にか取り入れていった。モースは幼い頃から人一倍短気で、学校を何度も退学になるほどであったが、日本滞在中、彼自身も言及しているが、短気を起こすことを忘れてしまうほど、日本人は穏やかで、和やかな人々であったのだ。モースは日本人の美德を取り入れることで、自身の欠点を補うことができたのだ。

また、日本人の「争わない」という美德の他にも様々な日本人の美德がモースの中に取り入れられていった。例えば、「礼儀正しさ」、「勤労・勤勉」などを上に挙げた。特に、研究者であるモースは、生涯自費で動物学や日本についての研究に勤しんだ。研究費を勝ち取ることに奔走する多くの研究者がいる中で、モースは決して裕福だったわけではないが、生涯自費で研究をした。当時、研究者が自費で研究を行うというのは珍しく、何度かそのことが新聞記事になったほどである。モースが生涯自費で研究を行った背景には、日本人が地道に働き、質素儉約に暮らす姿も影響していたのかもしれない。そして、モースは生涯、日本を、特に古き良き時代の日本を愛した。彼の心には常に、短い滞在ではあつたが、幸福そうに生きる日本人の姿があつたに違いない。

このように、日本文化に触れ、日本人と関わることで、モース自身大きく内面的に変容した。モースは人力車夫や子供のように、自分よりも地位の低い者であっても一段低く見下げることなく接した。彼は一般庶民から東大の教授陣や日本を代表する政治家などの地位の高い者まで、あらゆる日本人と分け隔て無く交流を楽しんだ。モースと交流した人々もまた、モースの温かくユーモアのある人柄に惹きつけられた。そこには、国を超えた、人と人との温かい交流が見て取れる。

モースと日本人との間には、多くの温かい交流があつた。特に、それは社会的地位の高い日本人とのみならず、彼は地位を問わず多くの一般庶民とも温かい交流をもった。多くの日本人の心はモースに対して開かれていたし、モースは来日後、日が経つにつれて、日本人の魅力にどんどん惹きつけられていき、彼自身の心も日本人に対して「あけっぱなし」になっていったのだ。モースと多くの日本人の間で行われた交流は、「アメ

修士論文要旨

リカ人」「日本人」の枠を超えていった。つまり、相手を「国」で見ることを超えて、個人の「人」として見るようになっていったのだ。それは、国際人として重要な考え方であると考える。

当時多くの欧米人は日本について、劣った国、野蛮な国だと見ていた。当時のアメリカと日本では、比べようのないほど社会的、技術的に大きな差があった。しかし、そのような発達した国アメリカから来日したモースは、明らかに社会的に自国よりも劣っている日本について、見下した見方をしなかったのである。彼は、「バラ色の眼鏡」をかけて日本や日本人を見ていた。モースの言う「バラ色の眼鏡」とは、相手の欠点や不足などネガティブなものに目を向ける見方ではなく、相手の中に自分にはないものをなんとか探そうとする前向きな姿勢である。彼は、日本を眺める中で出会う「違い」をネガティブなものとして捉えずに、「違い」や「違う文化」から学ぼうという視点をもっていたのである。

第4章では、真の国際人の在り方をモースに学ぶ。真の国際人とは、英語が出来る、出来ないということ以上に、人間性が重要である。現に、モースは日本語の能力がほとんどなかったが、多くの日本人と国を超えた、人間同士の温かい交流をもった。

その人間性というのは、まず、「バラ色の眼鏡」をかけるということである。つまりそれは、自分の国や自分と違う文化や考え方に会ったときに、頭から嫌悪感を抱いたり、否定したりするのではなく、肯定的に受け止めるということである。相手が外国人であるか否かに関わらず、自分と人との「違い」に対して否定的に感じたり、排斥したりしてしまうのが人の常であろう。しかし、モースはこのように「違い」を否定的に捉えてしまうのは人間の本性であると理解した上から、自ら「バラ色の眼鏡」をかけることを通して、自分になく相手にある「違い」から何かしらを学び取ろうとしたのである。そのような姿勢は、相手が外国人であるかどうか二関わらず、相手と良好な対人関係を築くうえで非常に役立つであろう。一見受け容れがたい事柄に対しても、相手も自分に対してそのように感じるのには当然で、相手の立場に立って理解しようとする態度が重要である。人は違って当然である。人は相互に理解できるという信念が、モースの根底にあったからこそ、彼はこのような考え方ができたのであろう。

また、モースは日本人に対して、「外国人」として接しなかった。彼は「人間の本性は何処に行ったところで皆同じである」という考えのもと、人を「国」で見ずに、それぞれの人間性を持った個人の「人」（パーソナリティー）として見て接した。モースと多くの日本人との交流は、「国」とい概念を越えて、同じ「人間」同士の温かい交流であり、友情であった。

私達日本人は真の国際人になるために、以上の点をモースから学ぶことが大切である。また、私はそのことについて、次のことを加えたい。それは、モースがとても称賛した古き良き「日本人の美德」を私達一人一人が個人の中に養うことである。日本人の私達が国際人になるためには、日本人としての自覚、つまり「日本人としてのアイデンティティー」を理解し身に付けることが重要である。私達の祖先には、世界から称賛されるような素晴らしい美德があった。それらは、現代の私達の多くには消えてしまったものも多い。しかし、日本自体もグローバル社会になりつつある今日、私

修士論文要旨

達が改めてそれらに学ぶことは実に意義深いものである。日本人の美德が養われた国際人は、必ずや世界中の人々から愛され、世界の多くの人や国と良好な関係を築けるだろう。

主な参考文献

E・S・モース著、石川欣一訳『日本その日その日』（Japan Day by Day）1～3巻、平凡社 東洋文庫、1970年

E・S・モース著、石川欣一訳『日本その日その日』、講談社、2013年

E・S・モース著、斎藤生二、藤本周一（訳）『日本人のすまい』八坂書房、1919年1月25日

E・S・モース著、近藤義郎・佐原真 編訳『大森貝塚』岩波書店、1983年1月17日

守屋毅 編著『共同研究モースと日本』株式会社小学館、1988年7月1日発行

太田雄三『E・S・モース 〈古き日本〉を伝えた親日科学者』、株式会社リプロポート、1988年

磯野直秀『モースその日その日ーある御雇教師と近代日本』、株式会社有隣堂、昭和62年10月20日発行

小林淳一（江戸東京博物館）、小山周子（江戸東京博物館）『明治のころ モースがみた庶民のくらし』青幻社、2013年9月26日

渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社、2005年9月9日

上野益三『お雇い外国人③自然科学』、鹿島出版、昭和43年6月5日第一刷発行